22. おもちゃ（耍貨）

『湖雅』[i]巻九“起用の属”に次の一節がある。

“摩候羅、案ずるに泥人形、俗称‘泥菩薩’のことである。毘山の泥で人や物の形を作り、子どもの遊びに使うものである。泥猫があって、蚕の箕に置いて、鼠をさけ、蚕猫という。また五色の粉で人や物の形を作り、‘糖作’といい、また‘飴菩薩’といい、また‘飴人形’ともいう。熬青糖は、木型に吹き付けて人や物の形を作るもので、‘吹糖’という、みな子どもの遊びに供する。酒宴や芝居の席で粉作や糖作を小皿に盛り、粘果[ii]に取り合わせる。だいたい子どもの遊び道具は、みな木や錫や紙や泥で作り、形式や名前はとても多いが、ひっくるめて耍貨（さか）という。”

又『通俗編』を調べると巻三十一の“俳優”類に“泥人形”の一節がある。いま次に録す。

“『老学庵筆記』に、鄜州（ろくしゅう）の田玘（でんき）は泥人形を作って天下に有名である。人形一対の値が十縑[iii]もし、一揃いになると値段は三十千〔三万〕。一揃いとは五あるいは七である。許棐（きょひ）に泥人形を詠んだ詩がある。”

“『方輿勝覧』に、平江府の土地の人間は泥塑に巧みで、彼らが作る摩候羅は特に精巧である。”

“『白獺髓』に、遊春黄胖は金門に起こる、土地に杏花園があって、遊人がその黄土を取って戯れに人形を作った。これを湖上の土宜〔土産〕という。”

“案ずるに、摩候羅、遊春黄胖は、ともに泥人形の別称である。
又『広異記』[iv]が載せる韋訓と盧賛善の事に、帛新婦子、磁新婦子というのがあるが、つまり今でいう‘美人’であるが、子どもに似せた者も往々にして帛を切り磁に焼いたりして一様ではない。”

范寅の著『越諺』(1882)は、方言を収録して甚だ詳細完備である。わたしはきっと相当おもちゃの名称があるだろうと思ったが、なんと一通り調べたが、何もないのは、まことに意外であった。孫錦標の『通俗常言疏証』(1925)は最近出たけれども、もっぱら古を以って今を証しているので、寥々何条しかなく、引くに足りない。中国は児童およびその生活に対してとても冷淡だと言える。『潜夫論』に、“あるいは泥車、瓦狗などの戯弄の具を作り、巧みさで小児を騙すのは、みな無益である”と云うが、これはあるいは中国の成人たちの玩具観を代表するのかもしれない。

『湖雅』の文章を読んで、かなりの思い出を蘇らせた。わたしの童年の思い出は暗澹としてしかもいささかぼんやりしているのだけれども。この“おもちゃ”という言葉はとても穏やかで、――そうだ、これは市門閣から青黛橋（もとの字は青道橋なのだそうだが、わたしは音によって書いた）までの通り、つまりいわゆる鶯項街の真ん中にあって、何軒かの店があり、その看板あるいは壁にはこの二字“耍貨”が書いてある。売っているのはどんな物か。竹や木の武器が一式、紙のお面、“勃勃倒”という起き上がり小法師、色で染めた木の盆・酒杯・酒甕、泥人形の蛙、あるいは虎や鴨でなんでもある。大抵が背中に穴が空いていて吹くことができる。あるいは底板の桑皮紙に挟まれた中に呼子を置き、それを抑えるとピーピー鳴く。このほかにももちろん“泥菩薩”があり、それが状元であろうが、老嫚（Laumoen、堕民の婦人）であろうが、あるいは“和気藹々”であろうが、みんな平等に棚の上に並んでいるのだ。だがわたしたちがそれが好きだった

のには別に理由がある。決して綺麗だったからではなく、ただ彼らの泥の背中から“痧薬”〔コレラの薬〕を削り取り、小さな瓶に入れて薬屋を開くことができるからであった。どのおもちゃ屋の品物でも、全部で四、五円もしない。だが、ああ！その店構えは本当に威厳があった。近くで見ようが遠くから見ようが、それだけでわたしたちを魅了した。もしこれが正月の三日前なら、そこから東に行くと、軒亭口（これは三叉路で、秋瑾女史が殺された場所）から大善寺までの路上に一二、封蝋ものを作る露店が見つかる。まだ覚えているが、蛙が六文、金魚が八文、三本足の蟇が十二文、果物は多分四文均一だったろう。魚獲りの老漁師は、白ひげ赤背で、二十四文もして、わたしが普通持っているお年玉の四分の一だったから、軽がるしくは狙えなかった。こうした封蝋細工はすぐ溶けるので、例えば一粒の楊梅だがしばらく置いておくと、片面が平べったくなって、鵞鳥の羽で記した丸い点が見えなくなってしまう。だから毎日点検して、冷たい水で洗わなければならない。しかしこれがまた容易ではなく、少し長く浸けておくと、中の葦の芯が膨らんで、三本足の蟇など背中に往往にして割れ目が生ずる。だがこれはなんとか数日は遊べるが、飴細工の人形や新粉細工の人形はせいぜいが一日ほどしか保たず、そして救う方法がない。飴細工の人形はまだ食べられる。飴を吹く人がいつも唾で指先を湿らすのが嫌でなければ。新粉細工の人形の唯一の道は汚水甕で、浸して柔らかくし一緒に鶏に飲ませる。ゴミの山に捨てるのはいけない。あまりにも“人（形）に罪を着せすぎる”からである。比較して最も面白いのは飴菩薩ということになろう。これは実は飴を“鋳型にはめて”いろんな物にする。鶏あり、馬あり、大亀あり、橋亭あり、福の神あり、“ハーラー菩薩”と称する弥勒仏などなどあって、そして買うときは量り売り、一斤二百文に過ぎない。もし大路口の砂糖漬けの店に行くならばだが。一斤で、大きいのは三、四“尊”はあり、小さいのなら二、三十個と様々だが、実に安い。何日か晒しさえすれば、――しかも晒せば晒すほど白くなる、――墓参りの時〔四月の清明節〕まで保たせることができる。不幸にして一つ砕いてしまっても、分けて食べられ、味は“巧糖”〔上等の飴〕と変わらない。『湖雅』が“飴で作って小皿に盛る”というのが、この巧糖である。しかし子どもたちが喜ぶものにはまだ雑色の“棋糖”がある。これは食べて美味しいばかりか、遊んで面白い、実はやはりいろいろあるのが面白いからである。ちょうど茶菓子の百子糕および“梅什児”[v]（つまり“雑拌”）と同じように。

范寅については、民国四年の筆記にかつて一条を記した、題して「范嘯風」という。

“范寅、字名は嘯風、別号は扁舟子、前清の副榜、会稽皇甫荘に居り、外祖の家と隣である。子どもの頃遊びに行って、彼が童謡を集めるのに、近隣の子どもを招いて、歌唱を競わせ、お礼にお菓子を与えたと聞いたが、たぶんちょうど『越諺』を編んでいたのだろう。かつて自分の考えで船を作り、水車の法に倣って、外輪で船を進める。これを本の二丁櫓で試すと進んだが、今度は壮健な男が六七人足で漕がないとダメだったので、捨てて使わなかった。わたしはのちにその船に乗ったが、すでに外輪などの機械は取り外し相変わらず棹と櫓を使っていた。晩年は耄碌して、竈の下に坐って家人のために火を炊き、団子や炒り豆を礼にもらっていた。奇人であったのだろう。『越諺』はもちろん遺漏はあり、用字も全部が全部妥当とは限らないものの、方言を捜集記録し、粗俗を避けなかったのは、実に空前の作であり、なかなかできることではなく貴重

である。かつて章太炎先生が『新方言』を著され、蔡谷清君が一部を進呈して、すこぶる採用せらるる所があった。『越諺』には童謡が五十章ばかり収められ、重要なものは概ね備わっている。かつ口のままに記述し、修飾が加わっていないのは、至って識ありとすべきで、呂氏の『演小児語』よりもはるかに賢明である。”

しかし『越諺』の出版は光緒壬午(1882) で、その時わたしはまだ生まれていず、十前後になって、彼の逸事を聞いたのは、すでに出版の十二、三年後である。だから上文で“ちょうど『越諺』を編んでいた”というのは正確ではない。けだし談ずる者は往事を述べたのであって、誤記も当時の事情である。　民国十五年八月二十七日、北京苦雨斎にて。

※初出：1926 年 9 月 4 日『語絲』第 95 期

---

[i] 『湖雅』九巻　清の汪曰楨撰　光緒六年刊本　湖州つまり呉興地方の土産についての書。
[ii] 粘果　未詳。いま花生粘果というピーナツの砂糖がけがあるが、そういうものかどうか。
[iii] 縑　絹の生地、貨幣の代わりに使われた。
[iv] 『広異記』唐顧況撰　中華書局古小説叢刊本 119～120p.
[v] 「巧糖」、「百子糕」コメを炒って粉にし、そこに紅糖汁を加え、木型にはめて、整形した菓子。「梅什児」砂糖漬けの果物のアソート。